三郷アンダーザジャンクション

K07039　北澤　悠樹

Keywords
ジャンクション　郊外　風土
風景　記憶　ノスタルジー

1.プロローグ

ジャンクションのあいだを、
一本のまっすぐな道がのびていく。

その道はまるで戯れるように、
ときに脚元を縫ってまわり、
ときに地中を潜り、
ときに車の上を横断していく。

高架が錯綜する風景のなかに立ち現れるのは、
高く聳える鉄塔、
水面からの光で照らしだされる柱脚の数々、
草木に浮かぶ石の箱、
苔の映えた溜池、
そして、今にもかき消されそうな自分の存在。

ここには、わたしたちの情景が刻まれている。

2.計画背景

高速道路が景色を横断する光景は、もはや郊外のありふれた風景と化している。1963年に高速道路の建設が始まって以来、日本国内ではいたるところに巨大な土木構造物を見ることとなる。それを契機として、ジャンクションは、高速道路と高速道路の結節点として建設が始まることとなる。これらの土木構造物は、基本的に各々の街が有する社会的、ないしは歴史的文脈を無視し、暴力的に立ち振る舞わっており、決して街と交わることはない。そのため、周辺には都市の裏側ともいえるような醜悪な風景が広がり、ジャンクションそのものは、人々の生活と切り離された存在として認識されている。

その一方でジャンクションは機能美を有する。「車を高速走行させるため」という一つの目的に向かって合理的に生み出されたその造形は美しい。演出的な操作を一切、施されていない無骨で複雑な造形は、一般的な建築スケールのものでは実現されえず、単に「美しい」の一言で語れるのだと考える。

3.目的

ジャンクションは郊外のランドマークとなりえるか?

このようなジャンクションの造形美・スケールを生かしてこの場所固有の、美術館のような、博物館のような、もしくは自然公園のような建築の設計を試みる。

4.敷地

埼玉県三郷市の北西に位置する三郷ジャンクション

写真1　敷地航空写真

三郷が成立してから半世紀が経過する。三郷の都市史を語る上で、このジャンクションの存在は欠かせない。

1985年に常磐道が開通したと同時に同ジャンクションも開通。1992年には、東京外環自動車道が開通。当時、本敷地を含めた一帯は水田が広がっており、その水田を規定するグリッドが街の構造を成していた。しかしジャンクションの開通後、その幾何学によって道は断絶された。現在周辺では、「ＩＫＥＡ」や「ららぽーと新三郷」などの開発が行われている。資本主義社会を代表する各企業の参入によって、街はテーマパーク化し、郊外の雑然とした風景が広がっている。

5.設計趣旨

本敷地は、東京外環自動車道が通っているように、郊外の一角である。「三郷ジャンクション」という場所は、高速道路の看板に記述される文字と変わりはない。そこに住む人にとっても、そこを利用するにとっても通過点にしかすぎず、認識されることは極めて少ないからだ。一日に何十万台と通過する高架の下では、30年近く手つかずの茫々と生い茂る草木が眠っている。これらは四季折々の表情をジャンクションにもたらしている。加えて、ジャンクションに注がれる雨は、土砂やチリを巻き込み湿地を生み出している。整備されていないであろうコンクリートむき出しの溜池、巨大な樹木のように乱立する高架の柱脚、そこを行き交う車。これらはせめぎ合い、混ざり合い、一つの大きな風景を生み出している。

ジャンクションとその脚元に広がる風景を、この場所特有の「風土」として捉え直し、郊外の記憶を刻んでいく。ジャンクションはときに鑑賞の対象となり、ときに建築を惹きたてる背景となる。

6.設計手法

6-1　道

直角に交差する常磐道、東京外環自動車道と並行するように、グリッドに乗っ取った道を引く。直線上を歩くことによって曲線で構成されたジャンクション空間を体験していく。

6-2　パヴィリオン

ジャンクションとその環境を体験する6個のパヴィリオンを設計する。

6-2-1　投影の間

ジャンクションの造形を白い箱の中に投影する。巨大なスケールで立ちはだかるジャンクションの下には大きな影ができる。その影は時に、わたしたちの存在を覆い、闇の中へと溶け込ませていく。

6-2-2　鉄塔の間

「東京」との距離を図る。4方向を道路に囲まれた場所を光を伝うように昇っていく。その頂上には、わずかな空間がある。ジャンクションのどの高架よりも、少し高いところにあるその場所からは、新東京タワーの姿を眺めることができる。天気の良い日はくっきりと、そして、雲がある日はうっすらと立ち現れるその姿が、東京と郊外の距離を示す。

6-2-3　列柱の間

高架下の柱脚を反復する。およそ2500mmの太さを持つ柱脚は、コピーアンドペーストの操作によって教会のような奥行のある空間を生み出す。この空間は溜池上にあり、太陽光が水面を反射した光が柱を演出する。

6-2-4　草木の間

高架の足元に自生する草木を借景とする。天井から床の上1300mmの高さまで降りている垂れ壁は、人の水平への視線を奪い、草木へと焦点を向かわせる。その開口からは、草木の揺れる影が床へと落ち、そよぐ風にしたがって、空間を変容させていく。

6-2-5　測量の間

ジャンクションを測量する。高さ約10mのフォリーが6つ、道路を跨ぎながら直線的に連結されている。4m×4mの窓には十字のサッシが入っており、それを基準線として、ここには日常では知覚しえない高架の変化を見ることができる。

6-2-6　潮汐の間

溜池の水を潮汐に見立てる。潮が満ち引きを繰り返すのと同様のことが、溜池では起こっている。半円状の屋根の隙間からは光が降り注ぎ、水面の揺らぎを照らし出す。雨季と乾季によって露出したり、隠れたりするコンクリートの肌は、この場所の四季を表している。

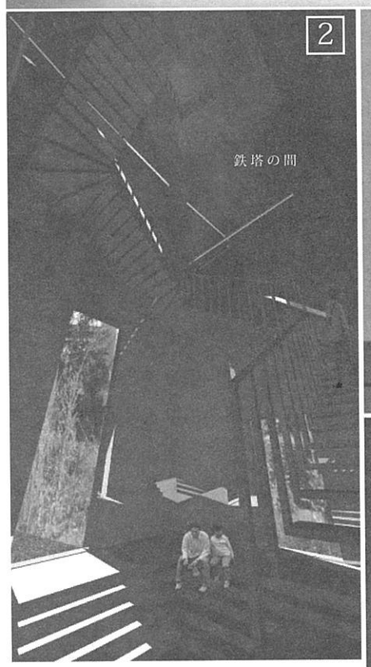
6-3　風景として・・・

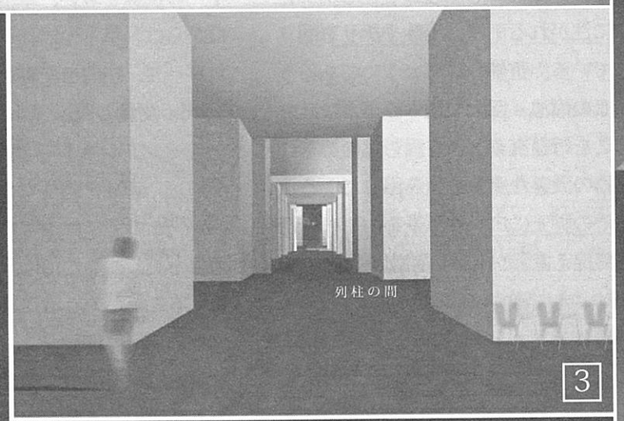
フォリーと道には郊外の記号が埋め込まれている。鉄塔、コンクリートの箱、柱脚、トンネル、ビニールハウス、水門、砂利道、鉄橋。これらはジャンクションを背景とすることによって、それぞれが意味を持ち、訪れた人々にイメージを喚起させる。ある一点の「見え」が、記憶の奥深くに内在する「情景」と重なったとき、郊外の風景は肯定されるだろう。

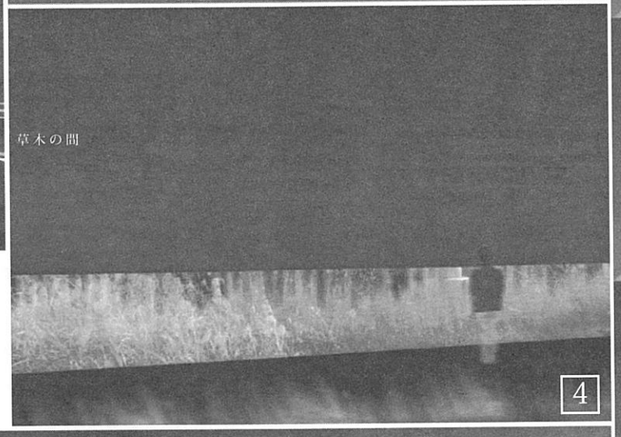
参考文献

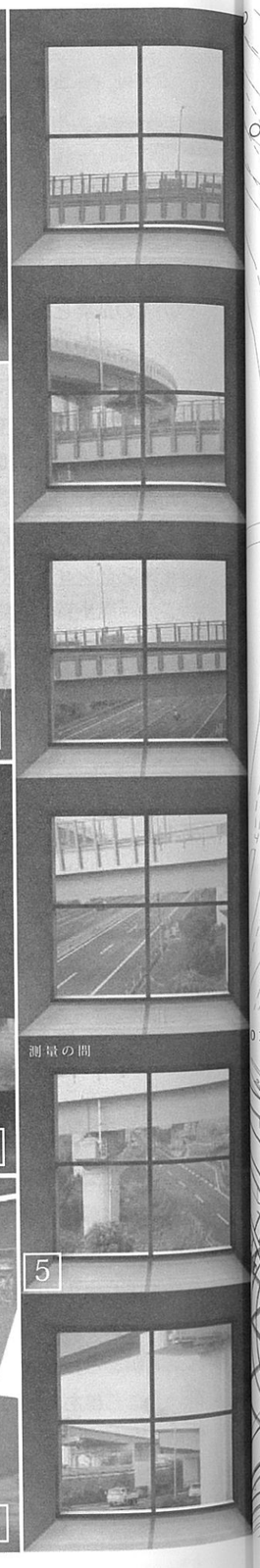
「空間の詩学」　ガストン・バシュラール
「空間・実存・建築」　ノルベルク・シュルツ
「プレイキング・グラウンド」　ダニエル・リベスキンド
「原っぱと遊園地」　青木 淳

研究指導：伊藤 洋子 教授
Yuki Kitazawa

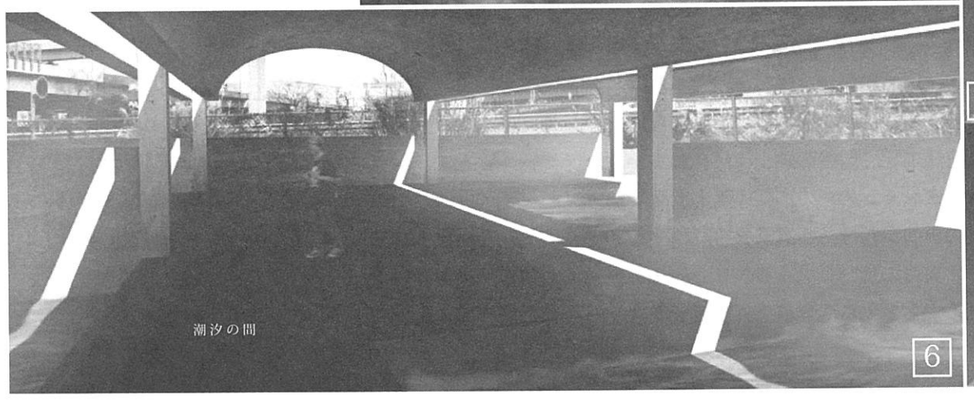


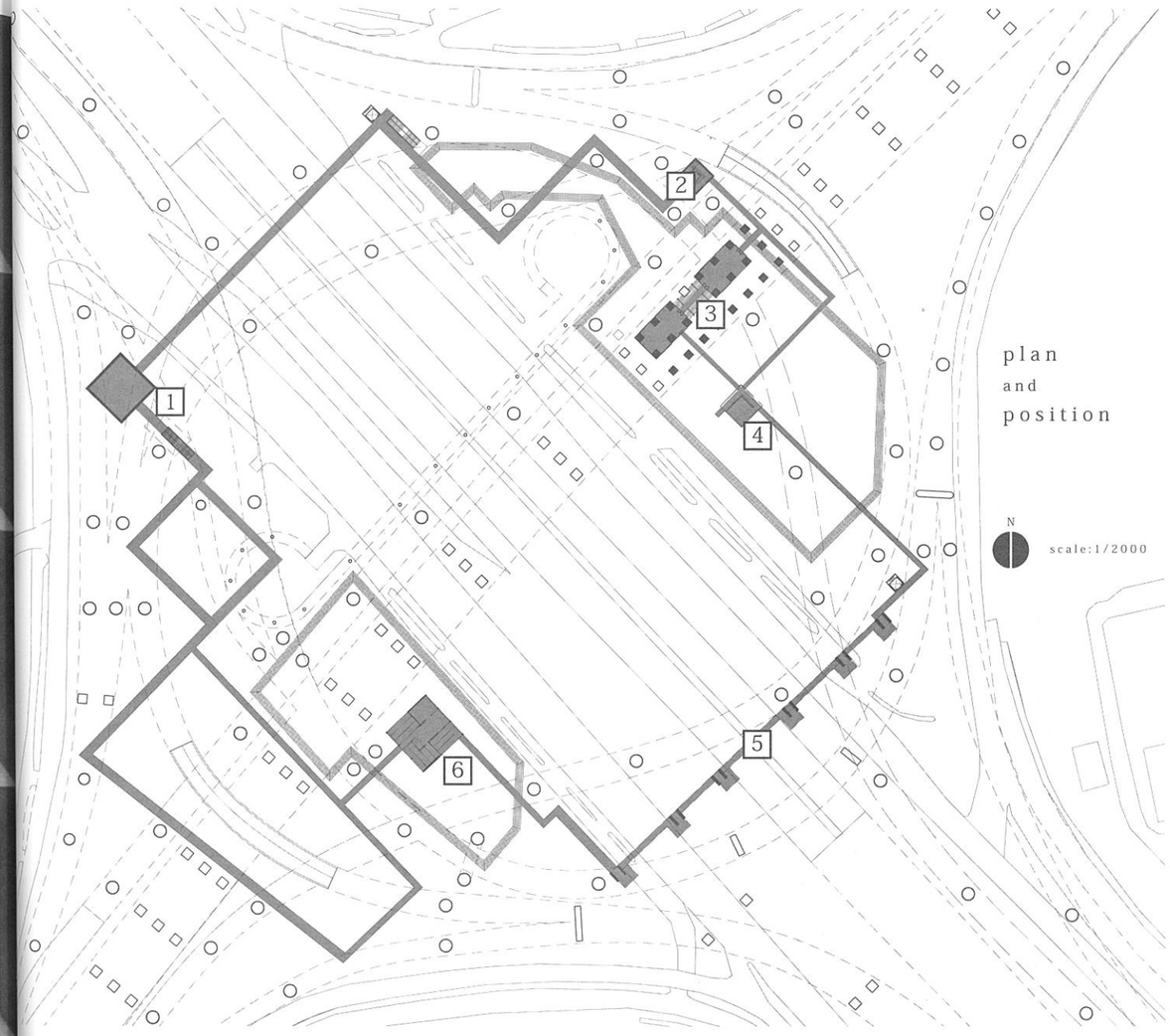




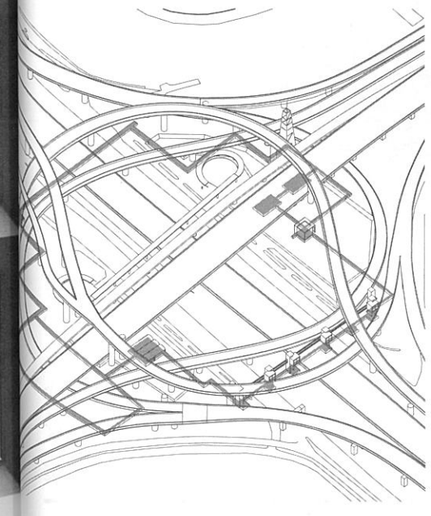
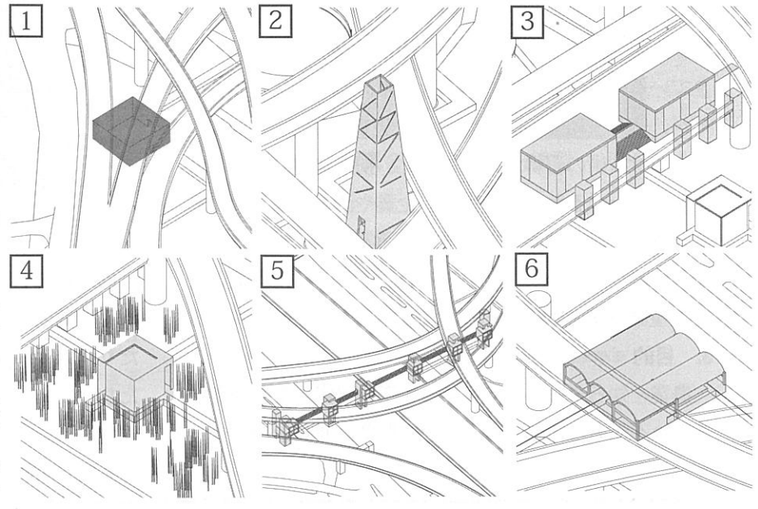


三郷アンダーザジャンクション





ometric



pavilion